

## 【別紙2】

### 論文審査の結果の要旨

氏名 小山 吉亮

イタリア・ファシズム期の政治に関しては、本国を中心に歴史研究の厚い蓄積があるものの、とりわけ権力構造に注目した、戦間期ヨーロッパをはじめとする他の独裁との比較研究は多くなかった。また、先行研究においては、例えば、国家教会関係、ファシスト党の有力者（ラス）の地域支配、「国家コーポラティズム」による労働組合の組み込みの試みなど、分野別に研究が分断され、相互の権力関係を包括的に捉えようとする視点に欠けていた。更に、1920年代末から30年代前半の時期は、ムッソリーニへの権力集中が進むなど決定的な変動が起きたきわめて重要な転換期であるにも拘らず、これまで十分な研究が行われてこなかった。

本論文は、これらの欠落を埋めるべく、膨大な一次史料を駆使した実証分析によって、1920年代末から30年代前半におけるイタリア・ファシズムの統治構造の変遷を、比較の視点からも了解可能な形で記述しようとした研究である。統治構造の変容の過程をムッソリーニとサブリーダーの間の相互作用を通じて描き出す手法が取られ、それぞれが自らの拠って立つ政治的資源に合わせて戦略を切り替えつつ、政治的権威（本論文では「威信」と呼ばれる）の強化を目指した結果として、統治構造が「政府首長独裁」から「ドゥーチェ独裁」へと変貌していく過程が緻密に跡付けられている。

本論文は全8章（序章、第1章～第6章及び終章）からなる。

序章では、イタリア・ファシズム研究を比較の俎上に載せる必要性を強調した後、本論文の目的を、「ファシズム期イタリアの統治構造とその変容過程について検討し、その特質を明らかにすること」と設定する。

第1章では、ファシズム期イタリア史に関する研究状況を概観し、本論文の位置付けが示される。1960年代のデ・フェリーチェらの研究以来、ムッソリーニ個人の要因で全てを説明しようとする「個人独裁」説が通説の地位を占めてきた。これに対して、近年は、全体主義を「そこに向かって進化していくためのパターン」「過程」などと捉え、その定義上、不完全・未完成なものなのだから、ファシズム期イタリアも「全体主義」であったと解する立場が有力になったと整理する。その上で、どちらの説においても、1920年代末から30年代前半は、カトリック教会などとの緊張が高まる中で重要な構造転換が起こったと考えられているにも拘らず、これまで見るべき研究が行われてこなかったことを指摘し、この時期の実証分析が持つ意義を強調している。

第2章では、ムッソリーニとサブリーダーの間の相互作用、それぞれの行動を規定する構想・政治的資源・戦略といった、本論文の分析の主たる構成要素が概観されている。

まず、ムッソリーニとサブリーダーとの相互作用の場を「頂上政治」と名付け、それが決して「普通の人びと」（本論文では「民衆社会」と呼ぶ）から遊離していたのではないことを強調する。政府、ファシスト党、教会（および系列の「カトリック行動団」）による民衆社会への浸透の試みは、この「頂上政治」の動向抜きには理解できないというのである。

次いで、ムッソリーニについて、いずれ死滅する旧世代（「頑固者の世代」）のファシスト化には期待せず、「ファシスト革命」の成功のためには青年の成長まで政権が「持ちこたえる」ことが不可欠だと考えるのが彼の構想の特徴であり、だからこそ旧世代との衝突を避けようとしたと分析する。

当初、ムッソリーニは政府首長としては国王と大評議会に対抗できず、党の長「ドゥーチェ」としては党を統率できていなかった。そこでムッソリーニは、自らの威信と政府首長の権限を強化し、国王と大評議会、そして党に対する優位を確立しようと企てた。

他方、サブリーダーのうち、地方で自律的な領域的基盤を築いた「ラス」も、1926年の一党独裁確立後は、ムッソリーニを筆頭とするヒエラルヒーに組み込まれたため、領域的基盤に代わる資源として、与えられた公的地位に専門特化して威信を高める道を選んだ。その結果、ムッソリーニに対抗できるほどの威信を持つバルボらを例外として、サブリーダーたちは激しい抗争に突入したという。

第3章は、多くのサブリーダーの当初の政治的資源である領域的支配（「ラス支配」）に目を向け、アルピナーティによるボローニャ県支配の事例の検討を通じて、その特質と限界を明らかにした。地元で複数のライバルの競合に直面していたアルピナーティは、中央の介入に頼りながらラス支配を確立しており、経済情勢の悪化によって中央への依存を更に深めていった。ラス支配は中央と地方の棲分けに立脚しており、中央の自律性が低く地方と連携せざるをえなかった1920年代前半までの中央地方関係に対応していた。そのため、集権化が進み中央の自律性が高まるにつれ、存立の基盤を失った。

第4章以降では主に中央の政治過程が検討される。

第4章では、1929年9月の内閣改造までの「頂上政治」の展開について、国制／経済制度改革と教皇庁との「和解」を軸に検討した。自由主義期の議院内閣制に代えていかなる国制を樹立すべきかについて、党内の様々な潮流を検討しサブリーダーたちの構想を見た上で、最大の争点となったファシスト労組について、最終的にファシスト労組の頂上団体が「裁断」される過程を跡付けた。しかし28年12月の「大評議会法」成立は政府首長独裁の制度化の第一歩となったものの、同法によって大評議会が肥大化した結果、「裁断」で一旦敗北した労組も影響力を残すことが可能になり、党に対する政府首長の優位も確立されず、「頂上政治」は新たな不安定要因を抱え込むことになったと評価する。

他方、26年2月のラテラーノ協定によって教皇庁との「和解」が達成され、この業績によりムッソリ

ーニの政府首長および「調停者」としての威信は頂点に達した。しかし肥大化した大評議会では「和解」への反対が強く、ムッソリーニはファシスト党とカトリック教会との間で綱渡りを余儀なくされた。党の古参である強硬派「黒シャツ」の統率に失敗しても、「和解」が頓挫しても、ムッソリーニの威信は大きく損なわれる危険があり、1929年9月の大規模な内閣改造はこの状況に対処すべく断行された。

第5章では、1929年の内閣改造で登用されたサブリーダーたちによって、30年後半以降、青年／教育問題が争点化され、「黒シャツ」勢力と教会の間の緊張が高まる過程を描き出す。この「国家・教会関係」の危機の收拾過程について著者は、カトリックとの「和解」に反発する「黒シャツ」を抑えられないムッソリーニが、党を統率できなかつたという印象を与えないようにしながら党の独走を制止すべく、あえて教会との間で限定的危機を引き起こしたのだという解釈を打ち出す。

29年末の大評議会法の改正によって「政府首長独裁」が確立したばかりであるにも拘らず、早くもこのような危機に直面したため、以後ムッソリーニは、自らの足場を党の長「ドゥーチェ」へと切り替える戦略転換に着手した。ムッソリーニの行動を拘束する「調停者」としての業績による威信ではなく、人格・属性によるカリスマ的威信の確立を目指して、党の長「ドゥーチェ」としての威信を絶対的なものにしようとし始めたのである。

第6章と終章第1節では、ムッソリーニの新たな戦略の下でサブリーダー間の抗争が激化していく過程を分析している。1931年12月にファシスト党書記に就任したスタラーチェは、一般党員の大量入党の推進に舵を切ると共に、「ドゥーチェ」崇拝の確立に力を注いだ。党が変貌を遂げる中で、カリスマ的威信を持たない「普通の」サブリーダーは、ムッソリーニからの自立を求めつつも、サブリーダー間の威信を巡る抗争を有利に進めるためにムッソリーニへの依存を深め、抗争の激化からアルピナーティら失脚する者が相次いだ。

他方、「黒シャツ」の間でカリスマ的威信を誇るサブリーダーは、ムッソリーニに対抗しようとする姿勢すら示したにも拘らず、この時期に関する通説的理解とは逆に、排除されず、寧ろ地位を強化した。党の長「ドゥーチェ」として絶対的威信の確立を目指したからこそ、ムッソリーニは党の中核である「黒シャツ」の動向に配慮せざるをえなくなり、ファリナッチらとの衝突を回避したのである。

終章第2節では、本論文の主題である統治構造の変容について知見を要約し、そこにおいてムッソリーニの威信が果たした役割を強調している。1920年代後半から30年代前半のイタリア政治は「国王・政府首長・大評議会の三元制」を基本構造としていた。ムッソリーニは、「革命」の成功のために政権存続を優先する構想に従って、国王、政府首長、大評議会の3つの機関を「三すくみ」の関係に再編した。その上で、大評議会を従えた政府首長が、大権を持つ国王を抑えて主導権を握る形で「政府首長独裁」が樹立されたが、政府首長独裁はムッソリーニが大評議会を手中に収めていることが前提になっていた。カトリック教会との「和解」を巡る危機でその脆弱さを痛感したムッソリーニは、属性に基づく

カリスマ的威信の確立へと戦略を転換したのである。後に 30 年代後半に「ドゥーチェ絶対主義」の昂進や「全体主義化」によって伝統的国制への攻撃が強まると、統治構造はドゥーチェと国王の間で二分されて「二元制」化する。

本論文の評価は以下の通りである。

本論文の長所としては、まず第一に、先行研究の空白地帯であった 1920 年代末から 30 年代前半の時期に関して徹底的な実証研究を行い、ファシスト党と国王・軍、教会などが共存する体制の実態が、30 年代後半のムッソリーニ個人独裁の強化へと変化するダイナミズムを明らかにしたことが挙げられる。この重大な欠落を埋めたことは、ファシズム期イタリアに関する歴史理解を大きく前進させたと評価できる。

第二に、「統治構造」の視座を採ることによって、これまで様々な領域毎に切り離されて理解されていた政治権力を巡る争いが相互に関連していたことを明らかにした。特に、政府・党の「頂上」におけるムッソリーニやサブリーダーの間の権力闘争が、「民衆世界」と党・政府官僚制・教会などが対峙する地方レベルの政治過程と密接に結合していたことを極めて説得的に示した点は特筆に価する。本論文で「頂上政治」として描かれた政治過程は、これまでの研究動向では、ファシスト党最高幹部らの閉じた世界の中での抗争・序列争いに過ぎないと軽視され、社会史的な関心・アプローチを取る研究に比して冷遇される傾向すらあった。これに対して本論文は、「ラス」を中心とする地方レベルの権力闘争と「頂上政治」が不可分に連動していたことを綿密に実証することで、こうした固定観念を打破した。今後のファシズム期イタリアの政治史研究に中央と地方の連関という新たな視角を切り開くだけでなく、この時期に関する歴史研究全体の動向にも軌道修正を迫るインパクトを持つ重要な業績となったと言える。

第三に、第二の点と直接関連するが、本論文は、中央と地方の双方における権力闘争を緻密に実証するため、中央ではムッソリーニ個人文書やドゥーチェ官房文書に加え、ファシスト党や首相府以下の省庁の文書を渉猟したのみならず、ボローニャやルッカ県（トスカーナ州北西部）といった地域について複数の地方文書館を渡り歩いて多数の関連史料を調査した。本論文は、複数の地域における権力闘争について重厚な実証を平行して行うことで、ラスの権力のダイナミズムを地域間で比較するだけでなく、第二点で述べたように、中央の「頂上政治」との連関の中でこれらを統治構造全体の変容の中に位置付けることにも成功した。これは、膨大な時間を費やして特に地方文書館における地道な調査を根気強く続けることでしか実現し得なかった成果である。イタリアの文書館は整備が遅れており、特に地方文書館はまだまだ利便性が低い中で、本国も含めた学界に対する類い稀な貢献と言える。

ただし、本論文にも、問題点がないわけではない。

第一に、実証部分では綿密に議論を展開しているのに比して、「全体主義」「権威主義」などの比較政治の概念の設定や操作に関してはやや粗い点も散見される。イタリア以外の地域の事例にこれらの概念を適用しようとする際にも、不用意な議論を行っている箇所がいくつかあった。

第二に、ファシズム期に関する分厚い先行研究を十分に消化して新たな貢献をなそうと努める余り、分析の前提となるこの時期のイタリア政治の文脈の説明にやや不十分なところがある。

しかしながら、これらの点は本論文の価値と貢献とを大きく損ねるものではない。第一の問題点は、近年のイタリア・ファシズム研究が、他の「全体主義」や「権威主義」と分類される体制との比較を事実上放棄し、イタリア固有の事例としての理解に専念するかの如き傾向を示してきたことを憂慮し、イタリア・ファシズムの「特殊性」を強調する反論を十分に意識しながら、イタリアの事例を比較の土俵にもう一度載せようと格闘する中で生じた、いわば勇み足とでもいうべきものである。今後、議論をいっそう精緻化するなどして、著者がファシズム期イタリアを再び比較の土俵に取り戻すことが大いに期待される。

以上から、本論文は、その筆者が自立した研究者としての高度な研究能力を有することを示すものであることはもとより、学界の発展に大きく貢献する特に優秀な論文であり、本論文は博士（法学）の学位を授与するにふさわしいと判定する。